令和４年度後期特別企画展「立山のお地蔵さま－苦しみに寄りそう－」を終えて
―来館者との対話から―

石﨑　康弘

はじめに

私は令和３年４月に高等学校から当館に派遣された教員であり、初めて企画展を担当したのが、令和４年９月17日から11月６日に開催された、令和４年度後期特別企画展「立山のお地蔵さま－苦しみに寄りそう－」であった。本企画展は、立山の地蔵霊場としての一面に光を当て、立山地獄を舞台とした地蔵説話や、立山曼荼羅をはじめとした地蔵菩薩が描かれた絵画、県内外に伝わる立山ゆかりの地蔵菩薩像から、地獄の救済者としての地蔵菩薩の功徳とその姿かたちを紹介した(1)。

開催期間中には、３日間の展示解説会（新型コロナウィルス感染症拡大予防対策のため、人数を制限し各日２回ずつ）に加えて、地元の芦峅寺の方々や当館ボランティア、学校団体、社会教育団体などからの依頼を受けて、のべ15回程、展示解説を行った。解説後には、来館者の方々から多くの貴重なご意見やご質問、ご教示などをいただいた。一教員が学校現場では出会うことのない、幅広い世代の、興味関心の多様な、県内外の方々とのふれあい、対話は、私にとって貴重な学びの場であった。

本稿では、来館者との対話から、後日調べたことや、来館者から寄せられた情報をもとに、新たに調査した立山ゆかりの地蔵菩薩像などを紹介したい。

１　来館者との対話からの学び

本章では、来館者との対話から、後日あらためて考え、調べたことについてまとめたい。

１－１　立山賽の河原の保存堂

本企画展では、立山賽の河原にある６体の石造地蔵菩薩像を安置するコンクリート製の保存堂【写真１】と、同地での鬼の厳しい呵責から子どもを守る地蔵菩薩の姿をうたった『立山賽河原地蔵和讃』（部分）を、壁面グラフィックにして大きく展示した。

来館者から「賽の河原保存堂横に建てられた石碑にある、佐伯何某とは誰か？」とのご質問を受けた。その場ではお答えすることができず、調査で撮影した写真で確認すると、「昭和四十五年四月卅日亡　佐伯幾夫」とあった【写真２】。後日、山での仕事に長年従事しておられた佐伯満寿男氏に尋ねてみると、この佐伯幾夫氏は芦峅寺在住で、ロッジ立山連峰に勤めていたそうである。幾夫氏は、昭和45年（1970）４月30日に、佐伯武夫氏と佐伯貢氏と一緒に、地獄谷の温泉パイプの修理に向かうが、４月とはいえ、地獄谷は約４メートルもの積雪があり、３人は地面を這う温泉パイプにたどり着こうと垂直に雪道を掘り、梯子を下ろして作業をしていたところを硫化水素ガスが襲い、武夫氏、貢氏は何とか命をとりとめたものの、幾夫氏のみがこの事故で命を落とすことになったという。この事故の様子は、３人の救助に入り自身も危うく二重遭難となりそうであった土井恒吉氏が、富山県警察山岳警備隊編『ピッケルを持ったお巡りさん』に記している(2)。幾夫氏の近隣に住んでいた方々に尋ねると、本石碑は幾夫氏の奥様が建立されたのだという。遺された奥様と娘さんは毎年、同碑に花を手向けておられたが、今はそのお二人も芦峅寺を離れており、なぜ賽の河原の保存堂横に石碑を建立したのかなどの詳細はわからないという。先述した満寿男氏は、この事故以降は、雪道を掘る際には縦に掘り進めるのではなく、避難しやすいように横に掘るようになったという。また、山で

働く人々は、この石碑を幾夫氏の墓標のように思い、手を合わせることもあったそうである。

１－２　立山賽河原地蔵和讃

芦峅寺在住の方々に行った展示解説では、当館のボランティア代表を務める佐伯照代氏が、前述した壁面グラフィックの前で、朗々と『立山賽河原地蔵和讃』に節をつけてうたわれ、喝采を呼ぶ場面があった。同氏が語るところによると、大正生まれの義母から聞いた話として、昔は芦峅寺宝泉坊でご詠歌（地蔵和讃）をうたい、閻魔堂の籠り行でも本和讃が読誦されていたという。

私は当初、照代氏の朗々とうたう姿やこのお話を聴いて、現在、芦峅寺で地蔵講といった宗教儀礼は行われてはいないものの、芦峅寺生粋の照代氏個人には芦峅寺の地蔵信仰が受け継がれていたのではないかと単純に捉えていた（後日、照代氏に詳細を聞いてみると、照代氏自身が本和讃との縁があり、他所の地蔵和讃を覚えていたことがわかった）。

福江充氏の研究によると、そもそも芦峅寺における地蔵信仰といっても一括りにできるような単線的、一面的に捉えられうるものではなく、芦峅寺集落の属する集団によって、以下の（１）～（３）が複合的、多層的に重なりあい、ときに棲み分けながら信仰されていたとご教示いただいた。

（１）芦峅寺一山の信仰・儀礼（プロの宗教家、主に男性によって担われたもの）
（２）各宿坊家個別の廻檀配札活動において、重点的に取り上げられた信仰（例えば、後述する教蔵坊の地蔵信仰など）
（３）芦峅寺内の民間信仰（庚申講、金毘羅講など、主に女性に信仰されたもの）

（１）については、『立山賽河原地蔵和讃』は、文政12年（1829）の『当山古法通諸事勤方旧記』や天保13年（1842）の芦峅寺一山の年中行事を記した『諸堂勤方等年中行事外数件』といった芦峅寺一山の古文書の中には記載が見られず、芦峅寺一山の正式な儀礼として本和讃がうたわれたとは考えにくい。（３）については、そもそも記録されること自体があまりないことから、女性たちを中心に信仰されていたとしても、古文書で確認することは難しいとのことであった。

（２）については、芦峅寺一山は寄合による情報共有の場を有してはいたものの、宿坊家という個人祭主がゆるやかに結びついた合議体と考えられ、芦峅寺一山としての約束事とは別に、各宿坊家が独立した祭主として、それぞれの才覚に基づいた独自の廻檀配札活動が一部行われていたと考えられる。宝泉坊に関しては、衆徒である泰音が江戸での廻檀配札活動について記録した『廻檀日記帳』に、立山曼荼羅の絵解き話材の一つとして、「地蔵尊（之御）咄し」などが記されている。また、宝泉坊の蔵書の中にも、本企画展でも紹介した『地蔵菩薩霊験記』や『地蔵菩薩応験新記』が見られることから、これらの書籍が参考とされ、ときには語りに盛り込まれたこともあったであろう[3]。さらに、芦峅寺大仙坊が、絵解きの際に『立山賽河原地蔵和讃』をうたっていた[4]というので、宝泉坊も檀那場において本和讃をうたっていたことも考えられる。しかし、近代に入って宝泉坊で女性たちが『立山賽河原地蔵和讃』を読誦していたという照代氏の義母の話と単純に結びつくとはいえない。近代以降に宝泉坊が芦峅寺集落の外から本和讃を採り入れ、経済的に豊かであった宝泉坊にサロン的に女性たちが集い、子を亡くした女性を慰める場でうたわれていたのかもしれない。今後の調査、研究が待たれるところである。

１－３　芦峅寺教蔵坊と地蔵信仰

本企画展では、かつて芦峅寺閻魔堂前庭に安置され、明治の神仏判然令にもとづく廃仏毀釈の影響で、まず小矢部市倶利伽羅の長楽寺へ移遷され、さらに明治６年（1873）に小矢部市にある観音寺に移遷された銅造地蔵菩薩半跏坐像を紹介した。本像は、蓮華座の刻銘から、文政８年（1825）７月に信州松本町の立山講中から寄進されたことがわかり、芦峅寺の共有地である閻魔堂の前庭に安置されていた。しかし、刻銘

には「願主 教蔵坊照界 立之」ともあることから、安置場所が閻魔堂という芦峅寺の共有地だからといって、本像が芦峅寺一山に寄進されたものとは必ずしも言えない。寄進者の所在地は、現在の新潟県糸魚川市から、長野県大町市や松本市、安曇野市などにまたがる約142村で、その分布は千国街道に沿っており、概ね教蔵坊の檀那場の分布状況と合致している。さらに、現在は福井県の大本山永平寺の開祖道元を祀る承陽殿近くに安置される銅造地蔵菩薩半跏坐像も、教蔵坊を願主として芦峅寺に安置されていたもので、それを示す「観音地蔵二尊建立証印」の版木（当館蔵）も存在する。

他に教蔵坊関係の資料としては、「立山地獄」の版木と刷り物（いずれも当館蔵）をパネルにして展示したが、これにも「願主 教蔵坊」とあり、芦峅寺一山名義のものではなく、教蔵坊の檀那場でのみ配札されたものと思われる。

さらに教蔵坊関係では、以下のような檀那場の信者などからの地蔵菩薩像寄進に対する證印がある[5]。

・「金仏建立證印　立山教蔵坊　観音地蔵二尊建立證印」（摺り物・封筒あり・寛政元年（1789））（個人蔵）
・「営鋳地蔵尊　支證　立山教蔵坊　金像地蔵尊施財稟」（立山教蔵坊［発］→信州細野村平林徳左衛門［宛］）（摺り物・封筒あり・文政８年（1825））（個人蔵）
・封筒「営鋳地蔵尊　支證　立山教蔵坊　太兵兵」本紙「金像地蔵尊施財稟」（立山教蔵坊［発］→信州板取村新野太兵衛［宛］）（摺り物・封筒あり・文政８年（1825））（個人蔵）
・「営鋳地蔵尊　支證　立山教蔵坊　金像地蔵尊施財稟」（立山教蔵密坊法印照界［発］→信州松本本町遠州屋久蔵［宛］）２点（摺り物・封筒あり・文政８年（1825））（長野県立歴史館蔵）

管見の限りでは、他の宿坊家でこのように地蔵菩薩をとりあげた版木、刷り物などが残っていないことから、教蔵坊は地蔵信仰に力点をおいた廻檀配札活動を行い、それは檀那場の信仰を取り入れながら形成されたと考えられる。教蔵坊にとっての地蔵信仰というのは、いわばお家芸のようなものであったのであろう。今回の企画展で資料を配列して、あらためて芦峅寺に残る地蔵信仰の資料において、教蔵坊の存在の大きさを感じることとなった。

２．新たに調査した資料

本企画展では、県内外に伝わる立山ゆかりの地蔵菩薩像やその縁起、安政５年（1858）の飛越大地震による大洪水後、泥中から拾い上げられ祀られた富山市石倉町の延命地蔵尊を紹介したが、展示解説後に、当館ボランティア会員の佐伯照代氏と髙田美也子氏から、立山ゆかりの３体の地蔵菩薩像についての情報をいただいた。後日、調査し、新たにわかったことをここに紹介する。

２－１　芦峅寺閻魔堂内の木造地蔵菩薩立像

本企画展開催中、芦峅寺閻魔堂の世話役でもある佐伯照代氏から、閻魔堂内に岩峅寺から北海道に移住された方から譲り受けた地蔵菩薩像があるとの情報をいただいた。本像は像高37.5㎝、像幅11.8㎝の木造地蔵菩薩立像【写真３～５】で、同氏によると、本像は岩峅寺に24坊あった宿坊家の一つ（何坊かは分からない）に祀られていたものとされる。その末裔である佐伯得太郎氏は、岩峅寺の常願寺川沿いの自宅で、同家先祖代々の心のよりどころとして大切に安置していた。戦後になって、得太郎氏が一家で北海道旭川市に移住した際、本像も得太郎氏の自宅に移遷された。得太郎氏が同地で逝去し、長女である片原陸奥子氏が本像を譲り受けたが、本像の来歴の詳細が分からなくなったこともあり、次女の小林富美子氏は「お地蔵さんを生まれ故郷である立山へお連れしたい」との思いを抱くようになったという。たまたま立山に関するテレビ番組で、当時、称名滝へと向かう藤橋付近にあった旅館「清流荘」が取り上げられ、片原氏は清流荘主人の佐伯金蔵氏に電話をかけ、本像の立山への里帰りについて相談した。金蔵氏は本像についていろいろと調

査するとともに、本像が立山に里帰りできるように尽力した。その甲斐あって、平成４年（1992）に、芦峅寺般若院の佐伯弘照住職の導きで、芦峅寺の方々が多く参集される中、本像が閻魔堂内に安置されたという。

本企画展後、照代氏が本像の来歴についてさらに片原氏に聞くと、片原氏から手紙が届いた。その手紙には、30年以上前に金蔵氏から教えてもらったこととして、本像は立山・山岳一帯の整備か何か開山の為の多勢の人達の安全祈願のよすがとして24体造られた地蔵菩薩像のうちの１体とあるものの、はっきりとはわからない。その後、明治期の廃仏毀釈の影響で24体は散逸したようで、「二十四体を戻す様つとめたが、二十二体まではみつかり、あとの二体はどうしてもみつからなかった。ですが、ごく近年京都で一体判明し、あとの一体が私共がお連れした仏像でしょう？でしたか、断定だったのか当時を反復しても定かに想いおこせないのです。」というのである（「　」内が手紙の文章のまま）。ただし、見つかったという22体についても現在は不明である。

ちなみに、本像の台座底には「佐伯光一氏より」とのペン書きの貼付けがあり、下２行は判読できなくなっている。佐伯光一氏とは、般若院佐伯弘照氏の御子息の名である。弘照氏、金蔵氏ともすでに他界されており、本像の詳しいことはこれ以上分からない。想像をふくらませれば、岩峅寺宿坊家が24坊あったことから、24体というのは各宿坊家に１体ずつ同様の地蔵菩薩像が祀られていたのだろうか。

２－２　永昌寺（立山町大森）の耳地蔵

立山町大森にある永昌寺には、「耳地蔵」と呼ばれる石造地蔵菩薩立像が厨子内に安置され【写真６】、33年に一度開扉される。今回、佐藤崇道住職の格別のご厚意により、ご開扉いただき、ご尊顔を拝すことができた【写真７】。本像は永禄年間（1558～1570）に芦峅寺の三途の川原に造立され、継母からのせっかんのために聞こえなくなった継子の耳を治したことから、この名がついたという。

そして、今回の調査で同寺に伝わる本像の縁起も見せていただくことができた【写真８】。縁起は昭和25年（1950）10月の開扉にあたって、永昌寺住職・天明佛心が記したもので、金色の表具に「大安良道童子　緑山永昌大姉　菩提」、「施主　安川五良左エ門」と墨書され、次のように記されている（できる限り旧字・異体字などは常用漢字に置き換えて表記し、変体仮名はひらがなにした。また、理解を助けるために句読点を加えたところがある）。

> 抑々当山に安置し奉る地蔵菩薩の由来を尋ぬるに、永緑（禄ヵ）年間に立山の麓、芦峅寺の三途の川原と称する所に建立せられしといふ。立山登山の人々ハ必らず此の尊像を拝し奉り、六根清浄にして登山満足を祈願す。此の村の北端に貧しき一家あり。夫婦の中に一男ありて漸やく其の日を送る。妻は畑に、夫ハ樵を業とし生計を立ておりしが妻女は、ふとした病が元となり三才の一子を残して遂に黄泉の客とはなりぬ。其の後夫は村人のすすめに依り、後添を迎へ睦じく暮したるが後妻に一子生れてよりは、世の常として、いつしか先の子を、うとんずるの心を生じ、加ふるに家計貧しきが為め、吾が子に食を与ふるも、先の子には与へぬ事の多かりき。頑是なき子は、母よ食を与へ給へと云へバ、却って、にくしみを増す有様なりき。先の子七才になりたる或日、母に食を求めしに、母は与ふるに小さき御握りを以て曰く三途の川原の地蔵菩薩に之を供へよ召し上りなば汝に食を与へんと、曰頃邪見の母様が今日ハやさしく下し玉へよ、と喜び勇んで彼の地に至り、謹んで尊像を拝し奉る。何分御丈け六尺余もある立像なれハ、如何に背のびをしても御口元に達ぜざれバ、片手に御握りを、片手に川原の石をかき集めて、漸やく踏台を作り、一心に尊号を唱へ奉る。此の真心感応してか、御口元へ棒（捧ヵ）げ奉りし御握りを一口に召し上り給ふ。あな不思議や、有難やと、尚も尊号を称へつつ、家に皈りて此の事を母に告げ、何卒食を与へ玉へと然るに母ハ烈火の如く子をののしりて曰く、石の地蔵が御握りを召すとハ汝の偽なり。日頃この母に真実を語らず、うそ偽りを申し、家の品物を盗み出して悪事の限りを尽す。故に母もいつしか汝をうとんずるの心とはなりたるなれと、攻めせっかんの限りをなす。されど彼ハ泣き乍ら、

母よ之計りハ真実なりと、更に、わびれる風勢もなし。
あきれ果てたる母親ハ亦もや小さき御握を作り彼に与へて曰く。もう一度之を地蔵菩薩に奉れ。召し上りなバ今度こそ必ず汝の欲する食を与ふべし。と之をおし頂きて川原に至り先の如く尊号を称へつつ、無念の境に入りてより菩薩の御口元へ棒（捧ヵ）げ奉るに、あな不思議や大きく御口を開かせられ、慈悲の御涙を流させ給へて之を召し上り然も一粒の御飯が御口元に残りおりたり。此の有様を遙かな樹影に身をひそめて見てありし、かの母人ハ始（初ヵ）めて無明の夢さめて、ざんげの涙を流し走り来りて彼の手を握り、あやまり果て、尊前にぬかずけハ、御口元に残りおりたる一粒の御飯を更に召し上り給ふ。罪業の深きを懺悔せし彼女ハ、ひしと子供を抱きしめて涙乍らに、汝ハ此の母の救への菩薩なり。此の浅ましき吾を救はんが為めに地蔵菩薩ハ汝の母親として御導き給ふ。あな有難やかたじけなや、と合掌して尊号を称へ奉る。之より後ハ、先の子も吾児も隔て無くいつくしみ育てたりき。
然るに母親の手荒き、せつかんの為め子供の耳が聞へずなりたるを母が一心に菩薩に祈願せしに、一七日にして全快したりしかバ、其の後ハ誰云ふとなく耳地蔵様と、あだ名するに至りたり。之より立山登山の人ハ云ふも更なり、次第に霊験新たかに、遠くの地にも伝はりて、参詣の善男善女絶えまなかりしと。
其の後、年移り星変り明治三年の夏、当山二十六世、百丈洪厳禅師毎夜の如く地蔵菩薩が枕辺に立たせ給ふを拝す。坐禅入定して無念の境に入り玉ふに「吾は三途の地蔵なり川を下りて此の地に化を引かん」と不思義（議ヵ）なる霊夢に従ひ、常願寺川を登り上りて三途の川原に至りて尊像を拝するに霊夢の尊体と同一なり、依りて芦峅寺に至り、此の由をつぶさに語り、遂に拝招の許を得翌年五月二十四日、当山へ迎へて安置し奉る。
斯くて首より上の病ハ事（殊ヵ）更に霊験新かにて祈願の人ハ必ず利益を蒙る。経に曰く。仏、帝釈に告けて曰く『一の菩薩あり、延命地蔵菩薩といふ、毎日晨朝、諸の定に入り六道に遊化し、苦を抜き楽を与へ給ふ。若し三途にあらんもの此の菩薩の体を見、御名を聞かバ、人天に生じ或ハ浄土に生ぜん、』と。されバ末世の吾等ハ深くこの菩薩の誓願を信じ一心に尊号を称念せバ、無量の利益を蒙り、累世の業障即時に消滅し、今世安穏、後生善生、成仏往生疑へ無く、永く安楽国土に住せん。依って各々難値難過（遇ヵ）の思を致し謹んで拝礼を遂ぐられたし。

永昌現住
天明佛心　記

昭和二十五年十月
開扉之日

上記の縁起によると、明治３年（1870）の夏に、住職である百丈洪厳禅師が、地蔵菩薩の霊夢に従って、常願寺川を上流に向かうと、三途の川原に霊夢で見た像と同一の本像があり、芦峅寺の許しを得て、明治４年（1871）５月24日に同寺に安置したとしている。佐藤住職のお話では、 実際には安政５年（1858）の飛越大地震による大洪水の後、芦峅寺から同寺近くの川原に本地蔵尊が流れつき、泥中から拾い上げられて、同寺に安置されたのではないかとのことであった。本像はまず同寺の地蔵堂に祀られ、後に現在のように本堂内の厨子に納められたとのことである。
また、耳の病が治るようにと、人々は底抜け柄杓を本像に奉納したという。本像が納められた厨子近くの天井には底抜け柄杓がたくさん吊るされている。佐藤住職によると、底抜け柄杓を奉納するのは、全国的に「耳が通るように（聞こえるように）」とのおまじないの意味があるとのことである[6]。

２－３　富山市田中町４丁目の田双地蔵尊

交通の要衝として江戸期には宿駅として賑わった現在の富山市新庄の地も、安政５年（1858）の飛越大地震による大洪水が襲い、大量の土砂のため、川は埋まり、丘は平地と化して、人々は移転を余儀なくされ

たという。その時、立山の方から流されてきたと言い伝えられているのが「田双地蔵尊」【写真９】である。その地蔵尊を祀る堂宇【写真10】内には、「地蔵尊の由来」が掲げられ、以下のように記されている。

地蔵尊の由来

安政五年二月二十六日安政の大地震により立山の大鳶小鳶が崩壊大洪水となり家屋岩石等多く流れ此の地蔵尊も流失し地中に埋没してゐたが後で之を堀出し現在地に安置して此の由緒ある地蔵尊を深く信仰して居るものと古老より云ひ伝えられてゐる

昭和五十年八月堂宇改築

議順　岸岡　正　記

堂宇を管理する田中町第４町内会長の大嶋忠雄氏によれば、地域の古老がいなくなり、本由来を記した「岸岡正」という方についても長龍寺（富山市千歳町）の住職だったこと以外はわからないとのことである。ただし、本由来に改築とあるのは、本地蔵尊はもともと外で祀られ、地蔵祭の時だけ仮のお堂に入れられていたが、昭和50年（1975）に現在の堂宇が建立されて、その中に安置されるようになったからだという。また、本地蔵尊はちょうど田中町と双代町の中間的な位置にあり、地元の人々はかつてこの近辺を「田双町」と言っていたことから、田双地蔵尊という名がついたのではないかとのことである。

おわりに

本稿では、令和４年度後期特別企画展「立山のお地蔵さま－苦しみに寄りそう－」の来館者との対話から、後日あらためて考え、調べたことについて記した。まず来館者からの立山賽の河原の保存堂横の石碑への質問から、期せずして本石碑が昭和45年（1970）の地獄谷での痛ましいガス事故と関わることがわかった。関係者をたどることによって、なぜ落命した地獄谷ではなく賽の河原の保存堂横に建立されたかなどの詳細が明らかになる可能性はあるものの、今はその聞き取りが難しい状況となっている。また、展示解説時の一コマをきっかけとして、芦峅寺における地蔵信仰が単線的、一面的に捉えられうるものではなく、（１）芦峅寺一山の信仰・儀礼、（２）各宿坊家個別の廻檀配札活動で重点的に取り上げられた信仰、（３）芦峅寺内の民間信仰とが、複合的、多層的に重なりあい、ときに棲み分けられていたことが示唆された。さらに、上記（２）として、教蔵坊は地蔵信仰に力点をおいた廻檀配札活動を行い、それは檀那場の信仰を取り入れながら形成されたものであることが示唆された。今後、千国街道沿いの教蔵坊の檀那場での民間信仰等について調査することで、教蔵坊の廻檀配札活動の実態がより明らかになる可能性がある。

次に来館者からの情報をもとに、新たに調査した立山ゆかりの地蔵菩薩像３体を紹介した。岩峅寺宿坊家に伝わり、戦後、北海道へと渡るが、平成４年（1992）に芦峅寺閻魔堂に納められた木造地蔵菩薩立像をはじめ、芦峅寺の許しを得て三途の川原から永昌寺へ移遷された耳地蔵と昭和25年（1950）の開扉時に書かれたその縁起、安政５年（1858）の飛越大地震後の洪水で立山から流されてきたとされる田双地蔵尊とその由来など、まだまだ未調査の立山ゆかりの地蔵菩薩像が存在することを改めて知る機会となった。

今後も来館者との対話を大切にし、立山ゆかりの地蔵菩薩像やその縁起についての調査を進めていきたい。

［謝辞］

福江充氏（北陸大学国際コミュニケーション学部教授）には、著作から多くの知見を得、参考とさせていただいただけでなく、芦峅寺一山の活動や教蔵坊、宝泉坊の廻檀配札活動などについて、ご教示をいただきました。

また、調査に際し、浅木清文氏、大嶋忠雄氏、大嶋ミヨ子氏、片原陸奥子氏、小林富美子氏、佐伯篤志氏、佐伯すが子氏、佐伯哲也氏、佐伯照代氏、佐伯満寿男氏、佐伯睦麿氏、佐藤崇道氏、髙田美也子氏（50音順）から、貴重なお話を伺いました。特に、永昌寺ご住職佐藤崇道氏には、資料撮影などに格別のご配慮を賜りました。

ここに記して、皆さまに深く感謝申し上げます。

［主要参考文献］

・福江充『立山曼荼羅－絵解きと信仰の世界』（法蔵館、2005年）
・福江充『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』（岩田書院、2018年）
・林雅彦『増補日本の絵解き』（三弥井書店、1984年）
・高瀬重雄『伝説とやま』（北日本放送株式会社、1971年）
・尾田武雄『とやまの石仏たち』（桂書房、2008年）
・渡浩一『お地蔵さんの世界－救いの説話・歴史・民俗－』（慶友社、2011年）
・米原寛『立山信仰史研究の諸論点』（桂書房、2018年）
・土井恒吉「恐怖のガス地獄」（富山県警察山岳警備隊『ピッケルを持ったお巡りさん』所収、山と渓谷社、1985年）
・野口安嗣「立山衆徒の出開帳」（『研究紀要』第11号所収、富山県［立山博物館］、2004年）
・多賀康晴「立山における地蔵信仰」（『研究紀要』第23号所収、富山県［立山博物館］、2017年）
・多賀康晴「立山における地蔵信仰（２）」（『研究紀要』第24号所収、富山県［立山博物館］、2018年）
・『立山町史 別冊』（立山町、1984年）
・『平成８年度　立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（一）室堂・玉殿窟』（富山県［立山博物館］、1997年）
・『平成９年度　立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原』（富山県［立山博物館］、1998年）
・『越中立山大鳶崩れ－古絵図が語る安政の大災害－』（立山カルデラ砂防博物館、1998年）
・『綜覧 立山曼荼羅』（富山県［立山博物館］、2011年）
・『立山・黒部山岳遺跡調査報告書』（富山県埋蔵文化財センター、2016年）
・『新 綜覧 立山曼荼羅』（富山県［立山博物館］、2022年）
・『立山のお地蔵さま－苦しみに寄りそう－』（富山県［立山博物館］、2022年）

［註］

（１）展示については、令和４年度後期特別企画展「立山のお地蔵さま―苦しみに寄りそう―」展示解説書（富山県［立山博物館］、令和４年９月17日刊）を参照のこと。
（２）富山県警察山岳警備隊編『ピッケルを持ったお巡りさん』（山と渓谷社、1985年）125頁。
（３）福江充『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』（岩田書院、2018年）268頁。
（４）林雅彦『増補日本の絵解き』（三弥井書店、1984年）223頁。林氏は、佐伯幸長氏談から、大仙坊Ｃ本の絵解きの際にこの和讃がうたわれたと述べる。
（５）福江充『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』（岩田書院、2018年）84頁。
（６）芦峅寺雄山神社境内の宝童社の「耳垂れ地蔵」にも同様の話があり、佐伯照代氏の姪の耳垂れがひどく、この耳垂れ地蔵に祈願した際、底抜け柄杓を奉納したという。

写真１　賽の河原の保存堂

写真２　賽の河原の保存堂横の石碑
（写真提供　佐伯哲也氏）

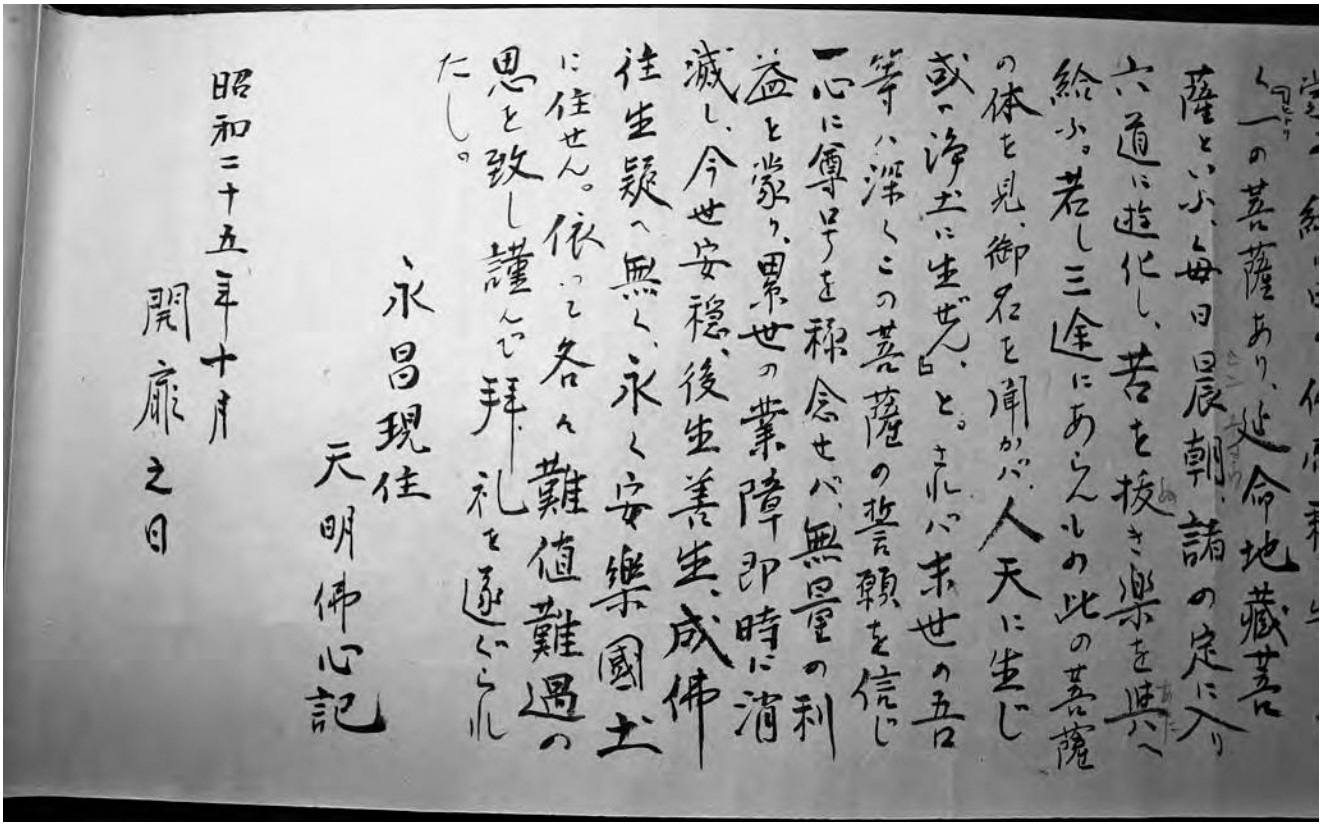
写真３　閻魔堂内の木造地蔵菩薩立像

写真４　側面

写真５　背面

写真６　普段の様子

写真７　耳地蔵



一の菩薩あり、延命地蔵菩
薩といふ、毎日晨朝、諸の定に入り
六道に遊化し、苦を抜き楽を與へ
給ふ。若し三途にあらんもの此の菩薩
の体を見、御名を聞かば、人天に生じ
或い浄土に生ぜん』と。されば末世の吾
等ハ深くこの菩薩の誓願を信じ
一心に尊号を称念せば、無量の利
益を蒙り、累世の業障即時に消
滅し、今世安穏、後生善生、成仏
往生疑へ無く、永く安楽國土
に住せん。依って各々難値難遇の
思を致し謹んで拝礼を遂ぐべ
たしと。

永昌現住
天明仏心記

昭和二十五年十月
開扉之日

写真８　耳地蔵の縁起

写真９　田双地蔵尊

写真10　田双地蔵尊を祀る堂宇